

謝靈運における道教的背景

北島 大悟

一 はじめに

謝靈運の山水描写は、彼以前にはあまりみられない特徴的な表現方法を持ち、それゆえ彼は山水詩人と称されてきた。だが彼の作品は山水を描くのみものではなかった。特に彼の後半生の詩には、山水描写とともに思想性を背景とする心情描写を行うものが多い。それゆえ、彼の山水表現とは単なる叙景ではなく、何らかの思想的基盤に立脚した文学表現であるとみることができるのである。

では、その謝靈運の文学の基盤にある思想とは、どのようなもののだろうか。今日まで、老荘思想や、仏教の影響という視点などから、さまざまな考察がなされてきた。

事実、「世説新語」などを見れば、謝靈運が生きた東晋から劉宋の時期、上流階級の人々が老子・莊子・易の所謂三玄に興味を持ち、また、仏教にも強い関心を抱いていたことがただちに知られる。

謝靈運もまた、三玄や仏教に関心を抱いていた。それは彼の交友関係や、「弁宗論」といった著作から、容易に見て取れることである。ただ、当時上流階級に流行していたのは三玄や仏教だけではなく、それら以上に大きな影響を及ぼしていたものに、道教があった。上流階級の人々の多くが道教に強く魅かれ、不老長生を願い、伝説上の仙人に憧れ、服薬・導引・祈禱などの様々な修行法を試みていた

のである。

謝靈運の文学においても、そのような道教の影響をはっきりと見て取ることができる。というよりも、謝靈運は生まれ出たその時点から道教的环境の中に置かれ、その雰囲気の中で育つたのである。そしてそのような謝靈運と道教との密接な関係を指摘しうる資料は十分に残っている。そこで本稿においては、その謝靈運の文学的背景にある道教的生活感覚について検討し、その文学的背景となるもの一つについて考察しようと思う。

二 謝靈運の出生譚

謝靈運と道教の関係は、まさにその出生の時点から発生していた。『詩品』上品の謝靈運條に以下のような文章がある。³

初錢塘杜明師、夜夢東南有人來入其館。是夕即靈運生於會稽。旬日而謝玄亡。其家以子孫難得送靈運於杜治養之。十五方還都、故名客兒。

（その昔、錢塘の杜明師は、ある夜、東南のほうから一人の人がやってきて、彼の家に入る夢を見た。その日の夕方、謝靈運は會稽に生まれたのである。その十日後に祖父の謝玄がなくなった。謝家では大切な子供だということで、靈運を杜明師の治に送って養育させた。彼は十五になつてからようやく都に帰つてきた。そのため彼を客兒と名づけた。）

このエピソードでは謝靈運が生まれてすぐに謝玄がなくなつたと記されているが、実際には謝玄が没したのは謝靈運四歳のときである。したがつてこれは謝安の間違いであると考えられる。⁴ともかく、宰相までつとめた謝安がこの年に没したため、謝靈運はその生まれ変わ

りと考えられたのであろう。謝靈運は四歳のとき（謝玄の死後）、錢塘の杜明師の「治」に預けられ、十五歳まで養育されることになった。

謝靈運が預けられた錢塘（現在の杭州）の杜明師については、『詩品集注』（上海古籍出版社 一九九四）には、唐の陸龜蒙「小名録」卷下の「明師名昊、字子恭。性敏悟、宗事正一、少參天師治録」という文章が引かれている。すなわち、杜明師とは杜昊、字を子恭という人物であるとしているのである。杜子恭の名は、『宋書』卷百自序にも見え、上流階級から民衆にわたって支持されていた宗教者であることが記されている。

張君房「雲笈七籤」百十一卷には杜明師（杜子恭）のことがもう少し詳しく書かれている。そこには「洞仙伝」から七十七名の伝記が収録されており、その中に杜曷、字は叔恭という人物の伝がある。また、王懸河「三洞珠囊」卷一に引かれる陳の馬枢「道学伝」にも杜昊、字を子恭という人物の伝があり、こちらは字が「宋書」の人物と合致する。そして「洞仙伝」と「道学伝」の記事の内容には共通する部分が多い。杜昊・杜曷・杜昊は杜明師と同一人物であると考えられる。

ではその杜明師とはどのような人物であったのだろうか。杜明師と道教の関係について、次のようなエピソードが「洞仙伝」にある。

杜曷、字叔恭、吳国錢塘人也。年七、八歳、与时輩北郭戲、有父老召曷曰、此童子有不凡之相、惜吾已老、不及見之。曷早孤、事後母至孝。有閭鄉郡、三礼命仕、不就。歎曰、方当人鬼叢乱、非正一之氣、無以鎮之。於是師余杭陳文子、受治為正一弟子。救治有効、百姓咸附焉。

後夜中有神人降云、我張鎮南也。汝応伝吾道法、故来相授諸秘要方、陽平治。曷每入静燒香、能見百姓三五世禍福、説之了然。章書符水、応手即驗。遠近道俗、歸化如雲、十年之内、操米戸数万。

（杜曷、字は叔恭、吳国錢塘の人である。年七、八歳のとき、同じ年頃の仲間と町の北で遊んでいると、ある老人が杜曷を呼びと

め、「この子は非凡な相を持っているが、惜しいことに私は老いているため、その非凡な行く末を見ることができない」と言った。禺は早くして父と死に別れたが、継母によく仕えた。そのことは郷郡に響き渡ったため、何度も職に就くように命じられたが、就かなかつた。杜禺は、死人の靈魂が混乱しており、正一の氣となつていないため、これらを鎮めることができている、と嘆いていた。そこで余杭の陳文子に師事して、一つの治を受けて正一弟子となつた。治における救済の事業において功績があつたため、人々は皆頼みにした。

その後、夜中に神人が降臨して、「私は張鎮南（張魯）である。汝はわが道法を伝えるべき者である。そのため秘要の方術と陽平の治を与えようときたのだ」と言った。禺はつねに静室において焼香を行い、人々の将来の禍福を見て取り、はっきりと説明することができた。章書符水は、彼の手に応じてすぐに効験をあらわした。遠近の道士・民衆が雲のごとく感化されて付き従い、十年の内に何万戸もの信者を得た。

杜明師は、死者の靈魂が混乱する世を嘆き、これを鎮めんことを志して道教の道に入つたのであり、そしてその道において優れた才能を発揮した。そしてその才能に対応してか、夜中に張魯が降臨し秘術と陽平の治を与えたという。これらのエピソードはまず靈魂の混乱する世、言い換えれば正当な祭祀を執り行える者がいない世の中において、自らが正しい祭祀を行えるものとして立つことを宣言するものであり、そして張魯による秘術と陽平の治の伝授は、その術や教義を、古の天師道の祖に基づいていることをアピールするものであつた。なお、陽平の治とは張魯の伝道の根拠地・本山であり、これも天師道の正統であることを主張しようとしていたものであつたといえる。杜明師とは、天師道の正統として、さまざまな秘術によつて多くの人々の支持を受けていた当時の有力な道士であり、実際東晋全域で最も大きな影響力を持っていた宗教家だつたのである。

三 杜明師と謝氏

杜明師は謝氏一門とも深い関係を持っていた。そのことはやはり『洞仙伝』に述べられている。

晋太傅謝安、時為吳興太守、見黃白光、以問曷。曷曰、君先世有陰德於物、慶流後嗣、君当位極人臣。

(晋の太傅謝安は、吳興太守であった時、黃白光を見たので、そのことで杜曷に質問した。曷は「君の先祖には陰徳があつたため、それによる幸せが後嗣である君に及んでいる。君は人臣の位を極めるだろう」といった。)

超自然的現象を目撃した謝安から相談を持ちかけられた際、杜明師はその現象を詮解きして、謝安の将来を予言している。謝安は後、実際に太傅の任に就いたため、この予言は当たっていたわけである。また、謝靈運の祖父謝玄にも、肥水の戦の直前に予言を与えている。

苻堅未至寿春、車騎將軍謝玄領兵伐堅、問以勝負。曷曰、我不可往、往必無功、彼不可來、來必覆敗、是將軍効命之秋也。堅果散敗。

(苻堅がまだ寿春にまで侵攻してきていないとき、車騎將軍の謝玄は兵を率いて苻堅を討伐しに行こうとし、勝敗を杜曷に問うた。

杜曷は「私は行かないほうがよい、行けば必ず功績がなくなる。苻堅は来るべきではない、来れば必ず敗北する。これは將軍が命を賭ける時である」と言った。苻堅は結果、敗北した。)

謝玄は太元八年(三八三)、京口の北府軍團の長として、肥水の戦において前秦の苻堅の軍を打ち破つたが、この記述によれば、杜明師は戦の前に勝利を予言していたのである。

『洞仙伝』にはこれら二つの問答の他にも、杜明師が陸納・桓温といった人物へ予言を伝えた話がとりあげられており、予言はいずれも的中している。杜明師の秘術の一端を示していると言えるが、この場合、予言が的中していることよりも、当時の最上流に位置する人物たちと交流があり、信頼されていたということのほうが重要である。それは杜明師の影響力がかなりのものであったことを示すからである。そうした社会的な影響力とともに、謝安や謝玄に予言を伝えるような間柄であったことを考えると、謝氏一門が杜明師の天師道を奉じていた可能性は極めて高いといえる。

また、『道学伝』には王羲之の臨終に関する、以下のような話が記載されている。

王羲之有病、請杜旻。旻謂弟子曰、王右軍病不差、何用吾為。十余日而卒。

(王羲之が病気になるだったので、杜旻に治療を要請した。杜旻は弟子に「王右軍の病は癒えることはない。私にはどうすることもできない」と言った。十日余りして亡くなった。)

このエピソードは杜明師が王羲之の死期を予見していたことを示すものである。そしてこれは杜明師が治病に長けていたことを示すと同時に、王羲之とも交流があったことを示している。王羲之の一族は代々熱心な天師道徒であり、王羲之の本人も道士許適と交友関係にあったことが知られている。そして実は謝氏と王羲之の一族は縁戚関係にあった。謝靈運の母の劉氏は、張彦遠『法書要録』巻二に引く虞翻「論書表」に「謝靈運母劉氏、子敬之甥。故靈運能書、而特多王法」と記されるとおり、子敬(王献之の字)の甥、つまり王羲之の外孫である。また、謝玄の姉の謝道韞は、王羲之の第二子王凝之に嫁している。杜明師は謝氏・王氏、双方から深い信頼を受けていた。そこには謝安の生まれ変わりと思われる謝靈運が預けられても何ら不思議ではない環境が存在していたのである。

では謝靈運は、杜明師のもとにおいて、どのような影響を受けたのだろうか。

まず杜明師に預けられる以前に、すでに彼の家庭環境は天師道色の濃いものであった。先に見たとおり、謝靈運の生まれる以前からその家庭は杜明師の影響を受けていたからである。そして謝靈運自身は、杜明師が「夜に東南から館に入り来る人物がいたことを夢みた」後に誕生したのであるから、杜明師にとってもその信仰上、特別な存在とみなされていた可能性がある。

杜明師の道教は天師道の正統をいく一派であると考えられていた。東晋前半期の葛氏道や上清派のような明確な特徴を持つものではないが、祭祀や祈祷といった基礎的な活動や、東晋期に発展した神仙道的な秘術といった、当時通行していた道教的要素を満遍なく保持していた。謝靈運にとってはそうした最も一般的な道教的要素を摂取することができる環境であった。さらにいえば、謝靈運は純粋な天師道の教義のみならず、杜明師のもとに流入していた多数の流派の情報に接し、そうした思想にも精通していた可能性も考えられるのである。

四 謝靈運のその後の人生への影響

謝靈運は十五歳になったとき、杜明師のもとを離れ、建康に移り住むことになる。杜明師の宗教施設において育てられたことの影響は、彼の性格・行動上に反映し、その後の人生にも陰影をもたらした。

その一つとして、建康に移り住んで間もなく、当時著名な仏僧であった慧遠との交流を始めていることが挙げられる。慧遠の徳の高さに魅せられた謝靈運は、すぐに心服したという記述が「高僧伝」巻六にある。しかし、入門はかなわなかったようで、慧遠の死後に作った「慧遠法師誄」では以下のように述べている。

子志学之年、希門人之末。惜哉、誠願弗遂、永遠此世。

(私は志学の年に、門人の末になることを願った。惜しいことに、その願いは遂げられず、永遠に別れることとなってしまった。) 一族の若手として期待されている人物の出家が認められないのは、当然のことである。ただ、この後も慧遠やその門人たちとの交流は続いていた。

ここで考えなければならぬのは、建康に移り住んだその年に、仏教に興味を寄せたという事実である。これは四歳から十五歳まで杜氏の治で育ったことが、彼の精神の深い部分に宗教的な思索や感性を刻み込んでいたからではないだろうか。杜明師のもとで育ったことにより、宗教に対する深い関心が形成されていたと考えられるのである。

また、青年期の謝靈運について、『宋書』卷六十七謝靈運伝に以下のような記述がある。

性奢豪、車服鮮麗、衣裳器物多改旧制。世共宗之咸称谢康乐也。

(性格は派手好みで、車や衣服は鮮やか、衣裳や身の回りの物は旧来のものを改めるものだった。世間はみな手本として、口々に謝康楽好みと称した)

他者とは違ったものを追い求め、最先端を進んでいないと気がすまない性格だったのだろう。当時最先端の思潮である道教や仏教、そして宗教特有のきらびやかな儀礼・建造物・装束などが、幼少期の彼に与えていた影響を見ないではいられない。

その後、劉宋へと王朝が交代してからも、謝靈運の宗教思想への傾倒は続いていく。武帝(劉裕)の死後、その側近であった徐羨之・傅亮らとの政争に敗れ、永嘉郡に太守として左遷された際、儒教と仏教の教えの違いに關して、複数の人物と思想論争を行っており、この論争は「弁宗論」として現存している。¹⁸⁾

また永嘉太守を一年で辞職し、故郷である始寧に隠遁してからは、曇隆・法流法師という仏僧を招きいれるため精舎を建築し、著名な隠士である王弘之や孔淳之らと交流するという隠遁生活を送っている。¹⁹⁾この時期には、「山居賦」という自らの別荘での生活をモデルにした作品を代表として、山水表現と思想的表現を並置した作品が多く目立つ。²⁰⁾政界から身を引いた形での隠遁、隠士や仏僧との交流、精舎の設立など、思想家然とした生活を送っているのである。そのほかに、隠遁中断の発端となる会稽太守孟顛との確執もまた、思想的見解の差異から生じた結果である。²¹⁾

以上のように、謝靈運の行動や性格には、宗教思想への傾きが非常に多く見て取れる。それは結局、杜明師の治で育てられたという事実にも多くの理由があるものだったと考えるとよいだろう。

五 当時における謝靈運像

そのほか、重要な事実として、謝靈運が客児という幼名をもち、また謝客という呼び名が後世においても用いられていることがある。²²⁾それは、謝靈運が当時最も著名な道士である杜明師および天師道と深いつながりがあったという事実を、誰もが知っていたということに他ならない。謝氏の一門であるという肩書きと同じ程度に、杜明師の治に預けられていたということを、当時の人々は重大に考えていたのである。このことは、謝靈運本人やその作品に対する読者の印象に密接に関わってくることである。謝靈運が受けた思想的影響とともに、当時の人々の抱いていた謝靈運像は、謝靈運の作品がどう受け止められていたのかという問題において、見過ごすことのできないものである。

また、『詩品』中品の謝惠連條に、謝靈運の詩作についてのエピソードが記載されている。²³⁾

『謝氏家録』云「康樂每対恵連、輒得佳語。後在永嘉西堂、思詩竟日不就。寤寐間、忽見恵連、即成「池塘生春草」故常云、「此語有神助、非吾語也。」」

『謝氏家録』には、「謝靈運は謝恵連と向かい合っていると、いつもうまい表現を思いついた。後に永嘉の西堂において、詩を考えていたが日が暮れても出来上がらない。その夜、夢の中で恵連に出会うと、すぐに「池塘春草を生ず」の句が出来た。そのため彼はいつも、「この言葉は神の助けがあつて生まれたもので、私の言葉ではない」と言っていた。」とある。

謝靈運は従弟の謝恵連と共にいるとうまい表現を思いつく傾向があつた。あるとき作詩に悩んでいると、「神助」によつて夢の中で恵連と出会うことができたため、「池塘生春草」の句を作り出すことができたという。これは「登池上楼」という作品の一句であり、対となる「園柳變鳴禽」と共に後世、名句として称されるものである。²⁴このエピソードは、謝靈運が詩作に宗教的な経験が絡むことがあると考えていたことを示している。この夢の話は自身の出生に関する逸話を念頭に置いた上での発言とも考えられるが、当時の読者は、謝靈運本人の発言としてこのような話が伝わったことにより、彼の作品に対してより一層宗教的なものを意識したことであろう。

当時の貴族階級には道教に対する強い関心があつたわけであるが、貴族はもちろん、民衆から多数の支持を受けている道士のもとで幼少期を送つたという謝靈運の経歴は、当時としても、非常に珍しいことであつたといえる。六朝期の著名な詩人の中にあつても、宗教施設で育つたなどという特異な経歴を持つ者は謝靈運以外に見いだすのは難しい。そしてそれゆえ、謝靈運は当時一般の貴族よりも、一層深く道教の影響を受けていたといえる。謝靈運と道教との関係には、いわば根源的なものがあつたのである。謝靈運の文学を道教的側面から解明していくことは今後の重要な課題といえるだろう。

(1) 謝靈運の作品が山水詩と呼ばれた用例として、白居易「讀謝靈運詩」があり、「吾聞達士道、窮通順冥數。通乃朝廷來、窮即江湖去。謝公才廓落、與世不相遇。壯志鬱不用、須有所洩處。洩為山水詩、逸韻諧奇趣。大必籠天海、細不遺草樹。豈惟翫景物、亦欲擲心素。往往即事中、未能忘興論。因知康樂、作不独在章。」と描かれている。

(2) 思想面から謝靈運を取り上げた論文としては、福永光司「謝靈運の思想」(『東方宗教』一三・一四 一九五八)、平野顯照「謝靈運の文学に対する仏教の浸透」(『大谷学報』四三―三三 一九六四)、大川富士夫「謝靈運と仏教」(『東洋史学論集』七―中国の宗教と社会― 一九六五)、木全徳雄「謝靈運の『弁宗論』」(『東方宗教』三〇)、中西久味「謝靈運と頓悟」(『森三樹三郎博士頌壽記念東洋学論集』朋友書店 一九七九)、矢淵孝良「謝靈運山水詩の背景」(『東方学報』五六 一九八四)、衣川賢次「謝靈運山水詩論―山水の中の体験と詩―」(『日本中国学会報』三六 一九八四)、鶴岡光昌「謝靈運の『弁宗論』における「道家之唱、得意之説」の解釈をめぐって―竺道生との関連を中心に―」(『仏教大学大学院研究紀要』一五 一九八七)、鶴岡光昌「謝靈運の『仏影銘』について―その仏教思想と山水表現の萌芽―」(『文芸論叢』三一 一九八八)などが挙げられる。

(3) 同様の話が劉敬叔『異苑』巻七にもあり、それが『詩品』の典拠と考えられる。

(4) 『晋書』巻七十九謝玄伝などの記述から考えると、太元十三年(三八八)に四十六歳で亡くなっているため、『詩品』の記載と合致しない。また、『宋書』謝靈運伝にある、謝玄が「我乃生疎、瑛那得生靈運。」と言って、謝靈運の聡明さを喜んでいる記述とも矛盾する。葉笑雪「謝靈運詩選」(古典文学出版社 一九五七)は「司馬光『資治通鑑』及『晋書』謝玄伝、都説太元十三年正月、玄死於会稽、時靈運已四歳。拠『通鑑』的記載、謝安卒于太元十年八月二十二日、恰好与鍾嶸的説法相合、可証鍾嶸記錯了人。」と、同族の謝安であるという説を提示している。この説に拠った。

(5) 「治」について、『詩品』鍾嶸の自注に「治、音稚。奉道之家靖室」とある。また、本来「治」とは教団を統制するための教区を指す。「靖室」とは儀式を行う建築物を指し、子供を養育する場所として適切ではない。よって、杜明師の教区の中心部、後世において道観と呼ばれるような施設で育てられたと考えるべきだろう。

(6) 『宋書』自序に「初錢唐人杜子恭通靈有道術、東土豪家及京邑貴望並事之為弟子。執在三之敬賢、累世事道、亦敬事子恭。」とあり、沈約の一族も信奉していた。

- (7) 杜明師に関する記述は、前田繁樹「杜子恭とその後裔」(『東方宗教』一〇二—二〇〇三)と、宮川尚志「中国宗教史研究 第一」第七章孫恩・盧循の乱(同朋舎出版 一九八三)によるところが大きい。
- (8) 『道学伝』は佚書。陳国符『道藏源流考』(中華書局 一九四九)は附録として「道学伝輯佚」を収録しており、その中に『雲笈七籤』中の「杜昊、字子恭。及杜、誠信精勤、宗事正一。少參天師治錄、以之化導、接濟周普。行己精潔、虚心拯物、不求信施。遂立治靜、広宣救護、莫不立驗也。」という記述を引いている。そのほかにも杜明師に関する記述をまとめて取り上げているため、参考にした。
- (9) 他にも杜明師の祭祀に関する記述として、『道学伝』杜昊伝に「為人善治病氣。人間善惡、皆能預視。上虞龍稚、錢塘斯神、並為巫覡、嫉昊道王、常相誘毀。人以告昊。昊曰、非毀正法、尋招冥考。俄而稚妻暴卒、神抱隱疾、並思過媚誠。昊為解謝、応時皆愈。神晚更病。昊語曰、汝藏鬼物、故氣祟耳。神即首謝曰、實藏好衣一箱。登取於治燒之。豁然都差。」というものがああり、民間信仰よりも優位にあることを示している。杜明師の道法が正統なものであると考えられていた資料と言える。
- (10) 東晋末に大規模な反乱を起こした人物に孫恩がいるが、『晋書』卷百孫恩伝によれば「孫恩、字靈秀、琅邪人、孫秀之族也。世奉五斗米道。恩叔父秦、字敬遠、師事錢唐杜子恭。」と、孫恩の叔父である孫秦は杜明師の弟子にあたること分かる。孫秦・孫恩は杜明師の死後、教団の一部を受け継いだと考えられ、その数が反乱を起こしうるほどの規模であったことから、杜明師の教団全体はそれ以上のものであったと考えられる。
- (11) 『晋書』卷九孝武帝紀の太元七年の記述に「八月、苻堅帥衆渡淮、遣征討都督謝石・冠軍將軍謝玄・輔國將軍謝琰・西中郎將桓伊等距之。」および「冬十月、苻堅弟融陷壽春。乙亥、諸將及苻堅戰于淝水、大破之、俘斬數万計、獲堅輿輦及雲母車。」とある。また『晋書』謝玄伝には、淝水の戦における謝玄の多大な戦功が描かれている。
- (12) 陸納に対しては「尚書令陸納、世世臨終而並悲侵淫瘡、納時年始出三十忽得此瘡、因為奏章云、令君大庾得過、授納靈飛散、方納服之云、年可至七十。」と治療薬を授けて予言を与え、桓温に対しては「大司馬桓温北伐、則以捷不。因云、公明年三月專征、当挫其鋒。温至枋頭、石門不開、水涸粮尽、為鮮卑所損。謂弟子桃葉云、恨不從杜先生言、遂至此敗。」と軍事作戦の失敗を告げている。
- (13) 王羲之と許邁との関係は、『晋書』卷八十五王羲之伝に「羲之既去官、与東土人士尽山水之游、弋釣為娛。又与道士許邁共修服食、採藥石不遠千里、徧游東中諸郡、窮諸名山、泛滄海。」のように描かれている。また、一族全体が天師道徒であったことは『晋書』王羲之伝の「王氏世事張氏五斗米

道、凝之弥篤。孫恩之攻会稽、寮佐請為之備、凝之不從。方入靖室講禱。出語諸將佐曰、吾已請大道許鬼兵、相助賊自破矣。既不設備、遂為孫恩所害。」との記述から判明する。

(14) 謝道韞について、『晋書』卷九十六烈女伝に王凝之妻謝氏として収録されており、その冒頭に「王凝之妻謝氏字道韞、安西將軍弈之女也。」とある。謝弈は謝玄の父でもある。また、(13)にあるように王氏の中でも特に熱心な天師道徒であった王凝之が謝道韞の夫であることは、当時の王氏・謝氏と天師道との関係を考える上で注意すべき事項であろう。

(15) 宮川尚志氏は前掲書において「道学伝」によると、彼はまさに正統の天師道の治頭である。」と述べ、(8)で取り上げた文章を引用している。

(16) 他にも杜明師の秘術に関する記述として、『晋書』孫恩伝に「而子恭有秘術、嘗就人借瓜刀、其主求之、子恭曰当即相還耳。既而刀主行至嘉興、有魚躍入船中、破魚得瓜刀。其為神効往往如此。」という逸話が記載されている。この話に見られる術にしても、本文中に挙げた予知能力にしても、仙術といってもよい物である。また『真譜』卷十九には、元嘉六年(四二九)に上清派の道士許黄民が錢塘の杜治に上清派の經典を携えて移り住んだことが記されている。これは他宗派との交流を示すものであり、このことから謝靈運も天師道以外の宗派の教義を学んでいた可能性がある。

(17) 『高僧伝』卷六慧遠伝に「陳郡謝靈運負才傲俗、少所推崇、及一相見、爾然心服。」とある。

(18) 「弁宗論」は『広弘明集』卷十八に収録されている。

(19) 曇隆・法流法師は「山居賦」にも名前が見える。また、謝靈運には「曇隆法師誄」という作品が残っている。王弘之・孔淳之は共に会稽付近で生活を送っていた隠士。『宋書』卷九十四隱逸伝に彼らの伝が収録されている。王弘之の従叔に王猷之がいたという記述から、謝靈運とも血縁関係にあったと言える。

(20) 「山居賦」は、その冒頭の記述に「謝子臥疾山頂、覽古人遺書、与其意合、悠然而笑曰、夫道可重、故物為輕。理宜存、故事斯忘。古今不能革、質文咸其常。合宮非緡雲之館、衝室豈放敷之堂。適深心於鼎湖、送高情於汾陽。嗟文成之却粒、願追松以遠遊。嘉陶朱之鼓棹、邇語種以免憂。判身名之有弁、權榮素其無留。孰如牽犬之路既寡、聽鶴之塗何由哉。」とあるように、山居の景観を描き出すだけでなく、自らの思想的態度をも主張しようとする傾向がある。また、この時期の詩も、前半部に叙景描写をおき、後半部に思想的な表現を多く含む叙情描写をおくという構成を持

つものが多い。

(21) 孟顛との確執について、『宋書』謝靈運伝には「太守孟顛事仏精懇、而為靈運所輕、嘗謂顛曰、得道必須慧業文人、生天当在靈運前、成仏必在靈運後。顛深恨此言。会稽東郭有回踵湖、靈運求決以為田、太祖令州郡履行。此湖去郭近、水物所出、百姓借之、顛堅執不与。靈運既不得回踵、又求始寧嵒嶂湖為田、顛又固執。靈運謂顛非存利民、正慮決湖多害生命、言論毀傷之、与顛遂構讐隙。因靈運横恣、百姓驚擾、乃表其異志、發兵自防、露板上言。」という記述がある。謝靈運の宗教的優位性を誇示する態度には、出生にまつわる逸話が影響を及ぼしていると思われる。

(22) 「謝客」という呼び名は、鍾嶸『詩品』序、もしくは梁簡文帝「与湘東王書」に見られるものが最も早い用例である。またこの呼び名が唐代の詩文に多数見られることを考えると、謝靈運が道教と関連性を持っていたことは、六朝後期以降も周知の事実として扱われていたと思われる。

(23) 『南史』卷十九謝惠連伝にも「謝氏家録」と同じ内容の話が収録されている。

(24) 「登池上楼」の全文は以下のとおりである。「潜虬媚幽姿、飛鴻響遠音。薄霄愧雲浮、棲川怍淵沈。進德智所拙、退耕力不任。徇祿反窮海、臥病对空林。衾枕昧節候、褰開暫窺臨。傾耳聆波瀾、舉目眺暉嶽。初景革緒風、新陽改故陰。池塘生春草、園柳變鳴禽。祁祁傷幽歌、萋萋感楚吟。索居易永久、離羣難處心。持操豈獨古、無悶徵在今。」

(人文社会科学研究所 博士課程)